
いろはにほへど、こいならず

能美夜澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いろはにほへど、こいならず

【Nコード】

N3846Z

【作者名】

能美夜澄

【あらすじ】

愛するモノと繋がった時、人は真なる力を発揮する
友情と青春の熱血学園フェティシズムバトル！
の予定

碧清学園特務部によつこそ（前書き）

作者は日本語が不自由でタイピングが遅いです。生暖かい目で見守ってください。

基本妄想の垂れ流しですから、詳しくは脳内補完をお願いします。

碧清学園特務部によつこそ

『個性』という言葉は酷く都合がいい。

世間一般においてどんなに受け入れがたい性格も、性質も、性癖も、『個性』なんて言葉1つでまかり通つてしまふのだから。

世話好き、意地っ張り。謙虚でも豪快でも。活動的でも退廃的でも大いにけつこつ。歳上好きであろうが人ではなく衣服、制服や装飾品に劣情を抱こつが別にいい。

度を越してさえないければ。

現代に於いては、アクが少ない、平均的な人間が多数を占めているからこそ、私に耐性ができていないのかもしれない。

我が国の教育が天才を生み出すための専門化されたものではなく、平均的な秀才を生み出すためのモノなのだ。

その中にあつても薄まらない『毒』を持った存在に抵抗を覚えるのも、私に限つたことではないだろう。

断じて私は短気などではない。そこばかりは始めに主張しておかねばなるまい。

未だに学徒の身に在つては、人間できてないこともあるやもしれぬ。だが人並み以上の忍耐力を培つてきたつもりである。

長々と前の口上を述べさせてもらったが、私が謂いたいのはつまり

「いろはッ、頼む！ 今日もお前のムレタ靴下を嗅がせてくれ！」
私の幼なじみは救いようのない変態である、ということだ
そんなことをのたまいながら、不肖の幼馴染みが神聖なる碧清学
園中等部付属図書室に飛び込んでくる。

学年どころか高等部とは校舎が違うはずなのになぜ居る。

「頼むよ。ホラッ、目の前のヒーターのおかげでいい感じになつて
るし早く靴をぬいデグア」

コイツが馬鹿なことを言い切る前に後ろからアタマに蹴りが入
られる。いつものことながら大丈夫なのか。そして飛んできた唾
をすかさず本でガード。すまない赤川先生。

「いい加減図書室内での大きな奇声を上げながらの奇行は控えても
られないですか、亜執センパイ」

そうクールに言い放つ黒髪ロングは蔵柿愛架。この図書室の主に
して冷血無慈悲な図書委員の才サ。

無類の本好きにして私の同級生。

それに相対するは、我が幼馴染みにして碧清学院高等部に在籍す
る生きる伝説（変態的な意味で）。

怯むことなく亜執晴二は無意味に澄んだ瞳を輝かせ。

「つまり、図書委員として騒ぎを見過ごせないと」

何故かタメをつくり。

「なら、静かにしてさえいれば」

胸を張り自らになんら恥じることなどないように。

「変態行為をしてもいいんだよな?! さあいろは! オレにその可憐にしてその実ワガママなかほりのおみ足をゲボア」

いい終わる前にセージにエルボーを叩き込む。ワガママなかほりってなんだよ。私は普通の体臭だ。

そして、これ以上騒ぎが大きくならない内に図書室から引きずり出すべくセージの肩に力を籠めて引く、が重い。無駄にデカイ図体をしおって。

「イヤ、いろはが小さいだけだロリヤ!」

そうか、まだ息があつたか。もう少し痛めつけねば。

「……これ、へんきやくおねがいます」

蔵柿女史に本の返却を依頼するのも忘れない。喉が乾燥してたから少しヘンになってしまったが。裏返ってなんてないな。

何故か驚いたかのような女史に本を押し付け、セージを引っ張りながら去る私。コイツには帰り道でたっぷりお仕置きをしなければ。

「いろはさんって喋れるのね。同じクラスでも初めて聴いたかも…」

未だに衝撃が抜けないでいる。あんなにクラスでは大人しいいろはさんが、顔を真っ赤にしたり殴ったりするなんて。

「でも、とつてもかわいい声。彼女なら、すごく愉しめそうね……」

蔵柿愛架は白かった筈の頬を残るところなく染めあげ、舌なめずりしながら妄想を膨らませる。唇からチロリと覗いた舌は、ゾツとする程に紅かった。

碧清学園特務部によつこそ（前書き）

作者の簡易な妄想の垂れ流しですから脳内補完をお願いします。

碧清学園特務部によつこそ

説明しよう。碧清<ヘキセイ>学園は初等部、中等部、高等部、果ては大学まで備えた超マンモス校なのだ。

場所は地方の山奥に位置し、生徒は親元を離れ寮住まいを強いられてしまう。

学園からの外出は週末のみ。申請制となっており門限もけっこう厳しい。

生徒達は永く訪れる待ち受ける灰色の学園生活を、悶々ムラムラと過ごさなければならぬ……と思いきや。

広大な学園の敷地内には商店街、バツティングセンター、プールに温泉、プラネタリウムまで完備してある。

そして我が高等部の校舎の裏にはその下で告白してOKを貰えた男女は結ばれると言う伝説の柿の木なんてシロモノも存在する。

青春の謳歌ってヤツがしたいキミは碧清学園に来ようぜ！ってなんだよいろは。そのジト目は「

何なんだコイツは。突然宙に向かって学園の紹介など始めおつてそれに柿の木の説明なんて伝説でもなんでもないだろ。

もしやさっきのエルボーが脳に深刻なダメージを与えてしまったのか。元が救いようがない変態であったとしても責任は感じてしま

仕方ないな。セージにちょっと目配せする。

「なんだ、しゃがんで欲しいのか。ホラ……って、なんで俺のアタマを撫でるんだ？そんな慈しむような瞳で」

ここまでアタマが残念になっては仕方がない。いやいやながら、本当に遠慮したいのだが、これからは私がセージの世話をしてやるしか……。

現在図書室のあった中等部の玄関を出たところなのだが、突然騒音が聞こえてきた。

どうやら発生源は、隣にある高等部の裏側のようで、煙やら爆発やらが起こっているようだ。

気にはなる。私の野次馬根性に火が点きつつある、が。それ以上のスピードで隣のバカはクライマックスに達したようだ。ウズウズと今にも飛び出しそうである。

セージに現場を観に行こうという意を伝えようとした矢先。

「落ちないようにしっかりと掴まってるよ、いろは！」

突然抱き抱えられた。What's? なにこれ。確かに私の力ラダはセージが軽々と持てるくらいちっちゃいけどだからと言っていきなり抱き着くのは駄目だししかもお姫様抱っこで公衆の面前を駆け抜けるなんて恥ずかしくてこれ以上顔をあげてられないからセージの胸に顔を押し当てるそう顔さえ見えていなきゃバレないよねそして落ちないようにしっかりと掴まれていったのはセージだしも

つと顔を埋めなきゃ匂いが嗅げないしセージの匂いは落ち着くからこの非常自体にはうってつけだから私の行動はなんらおかしいところはなく冷静に状況に対処しているはずもっといっぱいすわなきゃセージのおいカラダのナカいっぱい染み込むくらいまでもうにおいが染み着いちゃっていつでもセージのが感じられるくらいに…。

「着いたぞいろは。というか大丈夫か？顔真っ赤だぞ？」

どうやら必死にしがみついている内に酸欠になったらしい。

なにやら変なことを考えていたようだが酸欠のせいに違いないな。

恐るべし、酸欠。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3846z/>

いろはにほへど、こいならず

2011年12月13日08時51分発行